

横浜のスポーツイベント

渡部正次

- 一——はじめに
- 二——スポーツイベント
- 三——横浜のスポーツイベント
- 四——おわりに

一——はじめに

汗と太陽は夏のシンボルであり、この汗と太陽とに象徴される高校野球大会は夏の風物詩として多くの人々に親しまれ、真夏の大型スポーツイベントとなっている。

この高校野球大会は、教育とスポーツ、大会運営等の問題を抱えながらも、アマスポーツを代表する国民的スポーツイベントとして定着している。それは郷土の熱烈な声援と、全国民の耳目をテレビやラジオの前に釘づけにしてしまうほどの魅力を持ったスポーツでもある。

このような高校野球を含めアマスポーツは現在、新たな曲がり角にきているように思われる。例えば、スポーツにおけるアマチュアリズムの限界、スポーツとコマージュリズムとの関わりの問題についてである。

ロサンゼルスオリンピックは、これらの課題について、一定の方向に二歩も三歩も踏み出した。それは、アマとプロの境界をとり払う方向であり、アマスポーツへの商業主義の積極的導入であった。しかし、問題が解決したわけではない。『アマチュアスポーツの在り方』という古くて新しい問題は、なお問い続けてい

かなければならない課題である。

また、スポーツは、アマ・プロという競技的面だけでなく、文化としてのスポーツ、すなわち人間にとってのスポーツの意義を見直していく必要がある。

スポーツは、人間の心身の健全な育成と幸福な生涯を送るうえにおいて、その基盤となるものであり、複雑・高度化する社会においてますます重要な役割を担っていくものと思われる。これらのうち主要な役割は、第一にスポーツの持つ根源的役割、第二に教育的役割、第三には経済的役割である。

第一のスポーツの根源的役割とは、ス

ポーツの本質的要素としての競技性と遊戯性に内在している。競技性は、自己との闘争または他者との競争をとおして自己実現の欲求に応えることである。また遊戯性とは、自由かつ任意な活動であり、ルールと偶然が支配する非利害的活動である。したがって、それはプレイすること自体に楽しさが含まれる。

第二の教育的役割は、青少年の健全育成にスポーツが不可欠であり、また生涯教育にとっても、スポーツが最も重要な要素であり手段でもある。

第三の経済的役割は、一〇数兆円にものぼる医療費の増大を抑制するには、保

健予防としてスポーツの効果が非常に大きい。また、病気による欠勤や退職、労働災害からくる経済的損失を防ぐという面でもスポーツの効果は大である。

このように、スポーツは人間にとつてかけがえのないものであり、重要な役割を担い続けるものと思われる。

このようなスポーツの変化の兆しは、スポーツイベントの展開の中にもみることができるといえる。

二——スポーツイベント

①—スポーツイベントの種類

スポーツイベントは、スポーツへのニーズが多岐にわたり、かつ増大しているのに対応して、多様化と増加の傾向を示している。

スポーツイベントを参加規模別にみると、国際レベル、全国レベル、地域レベルに大別できる。国際レベルのイベントの頂点は、いうまでもなくオリンピックである。そのほか、今夏神戸で開催されたユニバーシアード大会、横浜で開催される国際女子駅伝などがあり、その数は年々増加している。しかも企業参加が目立つイベントでもある。また全国レベルのイベントとしては、国民体育大会、高校総体、全国高校野球、都市対抗野球などが代表的である。

さらに、地域レベルのイベントは、広域レベルと日常生活圏レベルとに分けられる。広域レベルのイベントには、五大市体育大会、県総体、都市対抗駅伝、全市レベルの各種競技大会があり、また日常生活圏レベルのイベントとしては、行政区レベルの各種競技大会・区民大会、町内会・自治会主催のスポーツ大会・運動会、職場でのスポーツ大会等である。

また、参加の有無によって、参加するスポーツイベントと見るスポーツイベントに分けることもできる。

参加するスポーツイベントは、日常生活圏レベルや職場での行事が主であり、各種球技大会、運動会、レクリエーション大会等がある。これらは、個人のスポーツ能力の優劣を競うより、全員参加あるいはできるだけ多くの人が参加すること、参加自体が目的となっている。

これに対して、見るスポーツイベントは、少数の選ばれた者が選手として参加できるだけで、ほとんどの人が観客としてスタンドやテレビの前に座ることになる。しかもイベントの規模が大きくなるほどこの傾向が強まる。

また、スポーツイベントは、運営の規模別にみると、ビッグイベント、ミドルイベント、ミニイベントに分けることもできる。

②—ビッグイベント

ビッグイベントは、国際レベルや全国レベルの大会であり、その規模が大きければ大きいほどその波及効果も大きい。単にスポーツのみならず、文化や経済にわたる複合的効果が期待できる。

スポーツに対する直接効果としては、スポーツ施設の拡充整備、競技力の向上、多くの人がスポーツへの関心を高めスポーツへの理解も深まることが期待できる。また、スポーツ以外の副次的効果として、人・物・情報の交流を活発にさせ、都市のイメージアップや市民のコンセンサスづくりに役立ち、時には市民エネルギーを湧出させることもある。

また、バラバラで立ち遅れがちな都市整備を一気に、しかも総合的に行う促進剤ともなりうる。(たとえば東京オリンピック・札幌冬期オリンピック)

さらには、宿泊・観光・ショッピングやスポーツ施設・都市施設の建設に伴う直接・間接の経済的効果、国際交流の促進などが期待できる。

たしかにビッグイベントは、このような多くの効果が期待できる反面、多くの問題点・課題を抱えている。

まず、どのようなイベントを誘致し、どのようなイベントを創造していくのかという中味の選択と決定の問題がある。名古屋オリンピック誘致は、その失敗例

であった。

つぎに、開催するための条件整備に膨大な経費を必要とするという問題がある。たとえば、スポーツ施設、宿泊施設、交通網、情報網の整備などの社会資本の蓄積が少ないほど費用がかさむことになる。(もちろん逆に、イベントを行うことによって、これら社会資本の蓄積が促進するというプラス面も大きいことは言うまでもないが)

また、大会の運営費用も多額なものとなるという問題がある。ちなみに、ロサンゼルスオリンピックは、総収入一、八〇〇億円で少なくとも五三〇億円以上の赤字を出したといわれているが、大会運営に一、〇〇〇億円以上の費用がかかったことになるのである。

さらには、イベントの成果をどう引き継ぎ、どのように活用していくかという課題がある。それは、建設されたスポーツ施設の有効活用や高まったスポーツ熱をいかに日常化させていくかということである。祭りの後の静まりに終わらせないことが肝要である。

そして、最も重要な課題はイベントの準備期間、開催時とおして市民参加をどう位置づけ実現していくかにある。

③—ミニイベント、ミドルイベント

日常生活圏レベルで行われるミニスポ

ーツイベントは、低額の費用で済み、誰もが参加可能であり、手づくりの運営が可能である。しかも、地域連帯を強め、ふれあいのある地域社会の形成に寄与する面でのメリットも大きい。

ミニイベントの課題は、ミニイベント相互の連携、展開するプログラムの多様化、日常生活との関わりをどうするかにある。

都市間の大会や全市レベルなどのミドルイベントは、メリット、デメリットがその規模や内容に応じて、ビッグイベントとミニイベントのそれぞれの面を強めることになる。

このミドルイベントの主な課題は、イベント費用の捻出、競技力の向上、市民参加をどうとりこんでいくのかにある。

三——横浜のスポーツイベント

横浜のビッグスポーツイベントを目指すものとして横浜マラソン大会があり、国際レベルのイベントとしては、国際女子駅伝がある。また、上海との友好交流促進を目的としたスポーツ交流も着実に実績を重ねつつある。

ミドルスポーツイベントとしては、五都市体育大会、郡市対抗駅伝、県総体、市民体育大会、各種目の市大会、市民スポーツの日・体育の日の行事などが主なものである。

ものである。

ミニイベントは、行政区レベルでの種目別大会、総合体育大会、スポーツ教室、区民ロードレース、区民トリムフェスティバルあるいは町内会・自治会単位の運動会などその数も多く、内容も多様化している。次に横浜マラソンとミニイベントの課題を探ってみたい。

①—横浜マラソンの課題

横浜マラソンは、第一回大会を昭和五十六年十一月に開催し、今秋には第五回目を迎えることになる。

この横浜マラソンは、国際港都にふさわしい秋のビッグイベントとして、市民の健康・体力づくりの一助となり、市民スポーツの振興となることを目的としている。現在は短縮マラソン(10km・20km)となっているが、将来的には一万人規模のフルマラソンとすべく調査・検討が行われている。

横浜マラソンの沿革は、昭和二十二年の各区対抗横浜駅伝大会にはじまり、その後、警察・消防対抗駅伝大会、市民健脚大会、ロードレース大会を経て、第一回横浜マラソン大会に引き継がれたわけである(表一)。

参加者数をみると、第一回が約二、〇〇〇人、第二回が三、〇〇〇人、第三回四、〇〇〇人、第四回四、八〇〇

人となっている。

この横浜マラソンの課題は、第一に内容・規模の拡大、第二に円滑な大会運営と経費、第三に市民参加とアフターフォローである。

第一に規模・内容の拡大として、①短縮マラソンからフルマラソンへ、②参加者数の拡大、③世界一流ランナーの招待④走行コースの選択などがある。

フルマラソンの実現、参加者数の拡大、一流ランナーの招待などは、横浜マラソンを国際マラソンとしてその競技性を強めていくのか、市民マラソンとして拡大していくのか、あるいは第三の道があるのかという横浜マラソンの基本的な位置づけをどうするのかにかかってくる。

これは、横浜マラソンの沿革や五回にわたる実績、市民ニーズの動向などを考慮して十分検討すべき課題である。

また、マラソンの拡大については、交通ストップ、警備、経費増など市民のコンセンサス、関係者との調整も重要な課題となる。

第二の大会運営については、現在、競技役員をはじめ、警備役員、大会役員、県警など約一、四〇〇人にもぼる方々の援助と協力に支えられて運営がなされている。大会規模を拡大するためには、さらに多くの関係者と市民の参加が必要であり、その成功の鍵を握ると思われる。

る。例えば、コースのゴミや石ころなどの清掃、沿道の美化や警備、ランナーに対する声援などがイベントを盛り上げるための大きな力になるが、そのためには多くの市民の参加・協力が不可欠となる。

また、大会経費については、①受益者負担、②ボランティア活動の拡大、③民間エネルギーの活用、などを検討していかなければならないと思われる。

神戸のユニバーシアードでは「オフイシャル企業制度」が採用され、公式企業

表一 横浜マラソンまでの沿革

昭和22年6月~29年2月	横浜駅伝大会(各区対抗)
26 2 ~29 2	警察・消防対抗駅伝大会
30 2 ~32 1	市民健脚大会(ロードレース駅伝)
37 1 ~41 1	ロードレース大会(三ツ沢スタート)
42 1	〃(大道小スタート)
43 2 ~50 1	〃(こどもの国)
51 1	〃(本牧産業道路)
52 1 ~56 1	〃(こどもの国)
56 11	第1回横浜マラソン

に選定されるとシンボルマーク、マスクット・キャラクターの使用料の支払いと商品・サービスの提供を義務付けられるが、その見返りとしてオフィシャル・サプライヤー、オフィシャル・スポンサーの名称、シンボルマークやマスケット・キャラクターの独占使用権、大会会場での広告権、商品販売権が優先的に与えられる。

この制度はロサンゼルスオリンピックでも大々的に採用され、神戸がそれをわが国で初めて取り入れ成功した。ただし、企業名や商品名だらけで、ゼッケンやハチマキまでコマースシャルが幅をきかすのでは市民マラソンとしてふさわしくないという考え方もあろう。

第三に市民参加とイベントのアフターフォローとして市民参加をみてみると、ランナーとしての直接参加と大会運営への参加が考えられる。

市民ぐるみのビッグイベントとし、より多くの市民参加を得るためには、「プレ横浜マラソン」として行政区単位の駅伝大会や区民マラソン大会を配置して盛り上げていくことも必要である。

イベントのアフターフォローとしては、盛りあがったマラソン熱を早朝ジョギング、職場のジョギングなど日常の運動習慣へいかに転化させていくかという課題がある。

これには、同好のグループづくり、容易にできる健康・体力診断などのプログラム開発、多様な運動処方の普及などソフト面での工夫が大切になってくる。

また、マラソンとジョギングにのみ熱中させるだけでなく、他のスポーツや健康・体力づくりへの関心を高める機会となるように配慮することが必要であり、また、スポーツを通して市民連帯への契機につなげることが、市民マラソンの持つもう一つの課題といえよう。

②ミニイベントとその課題

市民がスポーツのミニイベントに参加するのは、レクリエーション的行事、競技的行事、トレーニング的行事が多い(表1-2)。種目別では、球技が多く、中でもソフトボールが圧倒的である(表1-3)。また、主催者別では、自治会・町内会が三三%、市(区・施設を含む)が二二%、体育協会やレクリエーション団体が一五%となっている(表1-4)。このことは、地域の身近な行事により多くの人が参加しているわけで、スポーツ環境の整備が進めば、もっと多くの人の参加と多様な地域行事が展開されるものと思われる。

地域イベントを活性化させるためのスポーツ環境としては、何よりも生活の豊かさ、余暇の増加など経済的・社会的条

件が基盤となるが、特に重視されるものは、スポーツの場である。横浜では区スポーツセンターや地区センター(体育館併設)の急ピッチでの建設あるいは学校開放など施設面での環境整備は着実に拡充強化されている。むしろ、スポーツ施設の運営、クラブづくり、運動プログラム開発などソフト面での充実が重要な課題となっている。

さらに、スポーツの日常化に欠かせないのは指導者である。とくに、スポーツ相談、プログラムづくり、行事の企画・運営などのできる地域スポーツの指導者が必要となっている。

現在、二、四〇〇人の体育指導委員の方が地域スポーツ活動の中心として活躍されているが、さらに地域スポーツが活発に行われるためには、指導者の量的拡大、質的向上がいそがれている。

このため、健康・体力づくりの指導者養成が今年から、野外活動指導者養成が昨年から実施されている。この指導者養成の課題は、指導者間の横のつながり、指導の場の確保、継続的な事後研修等である。

スポーツ環境整備には、生活の豊かさ、スポーツの場、指導者に加えスポーツ情報が質・量とも豊富であることが不可欠である。すぐれた指導者や施設がいかに多くとも、それをつなぐパイプがな

ければ、気軽にしかも手軽にスポーツに親しむことがむずかしいからである。市民のスポーツ情報へのニーズは、施

表-2 市民が参加した行事
ベスト5

行事	%
レクリエーション的行事	74
競技大会的行事	46
トレーニング的行事	25
テストや記録測定的行事	9
発表的行事	2

表-3 市民の実施種
目ベスト5

種目	%
ソフトボール	26
バレーボール	9
野球	8
運動会	5
バトミントン	4

表-4 主催者別参加状況

主催者	%
自治会または町内会	33
市(区・施設を含む)	23
体育協会やレクリエーション団体	15
自分の職場	8
企業(独自のスポーツ行事)	4
民間(営利的行事)	3
県(施設を含む)	2
その他	12

資料:「くらしの中の生涯スポーツ実態調査」(表-3, 4も) 回答人数 350

設、指導者、行事、トピックなど多方面にわたり、それらに的確に応えるためには情報提供のシステム化と提供窓口の分散化が課題である。たしかに、情報社会といわれるように、種々の情報が氾濫し、その選択にとまどうほどである。しかし、スポーツ情報、とくに日常レベルでの情報は質・量ともにまだまだ不足している。これは社会体育や生涯スポーツに対する施策がやっとスタートについてばかりであり、情報データやその基盤も未整備な部分が多いからである。

今秋新都市センタービルに横浜市スポーツ情報センターが設置され、スポーツ情報の提供を開始した。種々の課題を抱えながらも、情報収集・提供のシステム化・メディア技術の積極的導入、情報の一元化等をめざしており、その成果が目される。

四——おわりに

スポーツ活動が活発になり、多彩なスポーツイベントが展開され、それが成功するのは、市民のスポーツへの関心と理

解が深まり、日常生活の中にスポーツが溶けこんでいるような状況があるからである。

このような状況を創り出すためには、行政、企業、市民がそれぞれの立場からスポーツに対するアプローチをはかり、その役割と責任を担う必要がある。

行政の役割は、国と自治体レベルに分けられる。国の役割は、スポーツ活動の基盤となる経済・社会条件の整備である。それは経済政策・労働政策などとおして、国民の生活水準を高め、スポーツを楽しむことのできる経済的・時間的余裕をつくり出すことである。

また、高齢化社会・余暇・医療費増大等の対応策としてスポーツ基本施策の企画・立案もいそがれる。同時にスポーツ施策実施に対して自治体や民間へ経済的援助と協力、スポーツに関する基礎調査・研究の実施も主要な役割である。国はこれらのスポーツ施策の策定・実施にあたっては、標準値ないし共通基準も大切であるが、地域の実態や独自性を考慮した柔軟な対応が望まれる。

次に自治体のスポーツ施策は、地域社

会の形成に寄与することを主眼とし、きめ細かなスポーツ振興策が中心となる。

これは、スポーツ施設の建設、指導者養成、グループ育成、運動処方やプログラム開発、スポーツ情報の提供などであり、市民の自主的なスポーツ・レクリエーション活動を促進し、市民が気軽に参加できる多様な活動機会を提供することにある。

企業の役割は、余暇の増加、企業内スポーツ施設の一般開放、企業内スポーツ活動の地域へ還元（地域イベントへの選手派遣、指導者の派遣）、スポーツイベントへの参加（協賛・後援・協力）等である。

しかし、スポーツ活動の主人公はあくまでも市民であり、市民の自主・自立による継続した活動が本来の姿である。特に現代社会においては、家庭や工場、農作業でさえ機械化が進み、日常生活の通常の労働によって、筋肉の強さや心臓血管と呼吸器の良好な状態を促進・維持することが困難になっている。

広く浸透しつつある運動不足と不健康な生活習慣を打破するためにも、市民各

自が健康・体力についての関心を高め、自分にあつたスポーツとその楽しみを見出すことが最も大切なことである。その契機としてスポーツイベントの持つ効果は大きい。とりわけ、オリンピック、ユニバシアードなど国際レベルのビッグイベントは、スポーツに無関心な層の興味をひきつけるばかりでなく、都市自体のイメージアップや社会基盤の整備など複合的效果が期待できる。

ビッグスポーツイベントの誘致とミニスポーツイベントの多様化・活性化をはかっていくことがスポーツの大衆化と高度化のニーズに応え、スポーツ振興の重要な足がかりに連なるものと思われる。

（参考文献）

- ①「現代のスポーツその神話と現実」
ヨークリー（道和本書院）
- ②「都市政策」三六号（神戸都市問題研究所）
- ③「月刊体育施設」一九八三年十月号
- ④「生涯体育」浜口陽吉（泰流社）
- ⑤「教養としての保健体育」宇土正彦
その他

△スポーツ振興事業団管理課長▽